次代を担う
ミドルリーダーの
提案

学力の多層化を切り口に生徒の状況と必要な指導を今こそ、校内で組織的に語り合う

近年、生徒の学力の多層化を指摘する声は多い。その一方で、生徒はどのように多層化し、それぞれの生徒の主体性を教師はどのように育んでいくのか、議論はまだこれからだ。「学力の多層化を踏まえた主体性の育成」という次代の課題について、中堅層にあたる2人の教師と考える。

「多層化」だからこそ求められる組織的指導

学習量の確保だけでなく質向上を学校全体で目指す

——今日は、多層化の中で生徒の主体性を育成するためには、どのような指導が求められるのかを考えてみたいと思います。編集部アンケートでも、生徒の学力が多層化していると多くの先生方が答えていますが（P.4参照）、まずは多層化に対してお2人の実感をお聞かせください。

福島　私もここ十数年で多層化は進んでいると思います。よく言われるのは、少子化に伴う高校入試環境の変化による下位層の増加です。「以前なら合格しなかったような生徒が入学している」といった言葉を、多くの学校の先生から耳にします。

木村　私も新入生の多層化は感じます。ただ、入学時点での下位層の増加は、中学生からすれば高校の選択肢が増えた結果とも言えます。多層化する生徒を育てることは、ますます重要なテーマになるはずです。

福島　入学時点での多層化に加え、もう1つ、入学後の多層化があります。入学後、中位層の生徒の成績が非常に大きく開くのがそれです。

——ベネッセのスタディーサポートを用いた分析からもその傾向は明らかです（P.15参照）。

木村　編集部アンケートでは、多層化には家庭の教育観や経済状況などを背景としたこれまでの学習経験の多寡などが影響していると考えている先生が多かったようですが、中位層の二極化にもこのような点が関連しているのかもしれません。

福島　それに加えて、中学時代、高

学力多層化を踏まえて考える主体性の育成

神奈川県
横浜市立桜丘高校
木村 剛
きむら・ごう

◎教職歴14年。神奈川県・横浜市立戸塚高校（定時制課程）を経て同校へ。赴任歴8年目。担当教科は理科。進路指導部に所属。

神奈川県・横浜市立桜丘高校
◎設立 1926（大正15）年
◎形態 全日制／単位制普通科／共学
◎生徒数 1学年約320人
◎13年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、東京外大、東京海洋大、信州大、横浜市立大などに19人が合格。私立大は、青山学院大、中央大、日本大、法政大、早稲田大、神奈川大などに延べ194人が合格。
◎住所 〒240-0011
神奈川県横浜市保土ケ谷区桜ケ丘2-15-1
◎電話 045-331-5021
◎Web Site http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/hs/sakura/

鳥取県立鳥取東高校
福島卓也
ふくしま・たくや

◎教職歴22年。鳥取県立鳥取西高校、鳥取県立八頭高校を経て同校へ。赴任歴9年目。鳥取県エキスパート教員（英語）。3学年主任を務める。

鳥取県立鳥取東高校
◎設立 1922（大正11）年
◎形態 全日制／普通科、理数科／共学
◎生徒数 1学年約320人
◎13年度入試合格実績（現浪計） 国公立大は、北海道大、京都大、神戸大、鳥取大、岡山大、九州大などに158人が合格。私立大は、慶應義塾大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ349人が合格。
◎住所 〒680-0061
鳥取県鳥取市立川町5-210
◎電話 0857-22-8495
◎Web Site http://www.torikyo.ed.jp/torie-h/index.html

校に合格するための学力は身に付けたけれど、授業の受け方や自宅学習の仕方などを習得できていない生徒が増えたことも中位層の多層化の原因だと思います。

木村 ただ、そうした多層化の現状を理解していながら、まだまだ私たち現場の指導は学習の「量」を確保することに重きを置きがちです。

福島 新入生の学習合宿などの初期指導で「1日○時間勉強」と「量」は求めますが、その後、高1秋くらいまでの「高校生になる期間」を通じて、継続的な指導を行き届かせるのは容易ではありません。ましてそれが生徒の学力層に合った、学びの質を高める指導となると、なかなか難しいのが現実だと思います。

――中位層は上位にも下位にも動くが、そこには学習時間という「量」以上に、学び方が影響していると考える先生は多いように思います。主体的な学びが身に付いている生徒ほど、その後の学習が定着していくという認識のようです。

木村 量を求める指導だけでは限界があることは、多くの教師が理解しているのでしょう。質を高める指導にも注力しなければいけない、と。

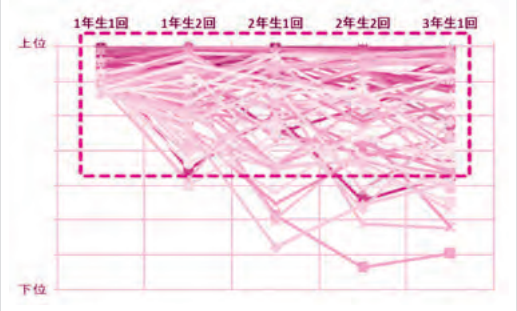
福島 学力だけでなく学び方も多層化している生徒に、層に見合った「一歩上の学び」を提示しながら、主体性を喚起することが重要でしょう。

木村 学び方が多層化している生徒を前に、問題意識を持った教師が「自分が何とかしなければ……」と、何

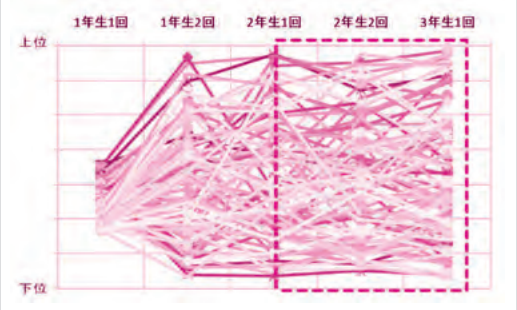
入学後に広がる成績 特に中位層で大きな差が

下は、北陸地区のスタディーサポートの1年生1回の成績を上位・中位（中上位と中下位）・下位に分け、3年生までの成績推移をグラフ化したものである。特に中位層では、入学後に大きく成績の差が開いていくことが分かる。

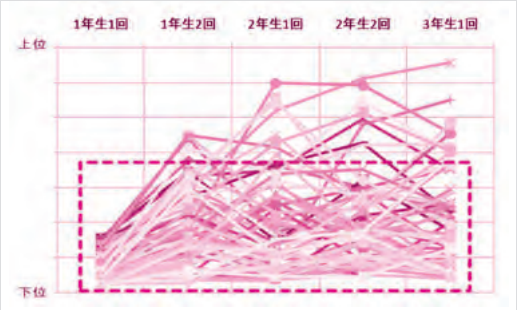
●上位層



●中位（中下位）層



●下位層



＊中位層は中下位層のみを抜粋
出典／ベネッセコーポレーション「2012年 北陸地区進路指導研究会資料」

種類もプリントを作ったり、学習記録のチェックを行ったりして、個々に対応しているのが現状だと思います。しかし、1人で出来ることには限界がありますし、学び方を身に付けさせるのであれば、教科を超えた連携が必要になってくるでしょう。

福島　多層化が進む中では、教師個々の「技」に加え、先に出てきた学校事例（P.6～13）のように、多層化した生徒に集団で働き掛けるための指導の軸や校内システムが必要だと思います。一人ひとりの教師が持つノウハウを共有し、指導を組織全体に広げる仕組みがあれば、教科を超えて生徒の勉強の仕方を適切に捉え、質を高めていくための指導が継続的に徹底できるはずです。多層化を嘆くのではなく、このような状況だからこそ、多層的な生徒を丁寧に見取り、指導につなげることが大切でしょう。そして、自分の見取りが妥当なのかを確かめながら、どの層にも適切な働き掛けをするためにも、組織的に指導を共有することが必要だと思います。

木村　生徒の多層化を感じる背景には、我々教師が多忙化し、多様な生徒を受け止め、対応する余裕がなくなっていることもあると私は考えます。ならばなおのこと、個人個人が努力するだけでなく、集団として効率的に対応する仕組みづくりが今後不可欠だと思います。

語り合う文化を生む「指導の方策検討表」

ゼロの状態から自由に多層化について語り合う

――今号の企画段階で、全国の先生方にご意見をいただきましたが、多層化に向き合いながら、主体性育成のための指導を検討するためには、校内で生徒の状況と指導の方向性を教科を超えて語り合うことが必要だという指摘をいただきました。

福島　指導を組織的なものにするためには、生徒の現状をどう見ているか、育成したい生徒像はどういったものか、それぞれの教師の思いを言語化し、共有する過程が欠かせないと思います。今の生徒の特徴についてブレーンストーミングし、書き出すだけでも意味があるでしょう。

木村　あらかじめ主体性育成という観点から、多層化をどんな層に分けて、更にどんな観点から分析するか、大枠を決めてからブレーンストーミングしてもいいのではないでしょうか。学校によって多層化の状況も違うでしょうから、全ての学校が活用できる様式は存在しないでしょうが、まずは上位層、中位層、下位層で分けるのが分かりやすいと思います。生徒を見取る項目は、授業と家庭学習の2つでしょうか。定期テストや模試の準備、事後学習も項目にしたいところですが、教師が詳細をチェックするのは現実には難しそうですね。

福島　そうですね。主体性を育むという観点からは、主体性の度合いで「上位、中位、下位」という層の設定をするのもよいように思います。おそらく、学力との相関も高いはずです。生徒を見取る項目は、教師の働き掛けで生徒の学びが確実に改善出来そうなものがよいと思います。

更にベテラン、若手にかかわらず、日々の学校で生徒を観察すれば書ける項目にしたいです（図）。

木村　こうした検討表を前に、生徒の状態や指導の方向性について語り合いながら、書き込んでいくわけですね……最初はうまく言葉に出来ず、埋まらないかもしれませんね。

福島　意外と難しいだろうと私も思います。ただ、それでも検討が始まったのなら、その学校は多層化という状況から、生徒への指導改善に踏み出していると言えるのではないでしょうか。「主体性」という抽象的

図　学力層別に生徒の状況と指導の方策を共有するための検討表の例

大学進学希望者の多い高校を想定し、「主体的に学びに向かわせるための指導の方策」を先生方が検討

主体性のレベル	授業の理解度	授業におけるノートの取り方	授業中の先生の話の聞き方	家庭学習への取り組み	主体的な学習者として一歩ステップアップさせるための指導の方策
上位層（＝学力の5層、A層）	・応用部分も含めて、全て理解できる。	・板書は書かれていることを理解しながら取ることが出来る。同時に、板書があっても、自分が理解できているところや、不要だと判断したところなどは、ノートに取らない、という判断が出来る。 ・板書以外にも、先生が説明をして大切だと感じたことはノートに取ることが出来る。	・話を聞き、大切だと思うことはメモを取りながら聞くことが出来る。 ・「なぜだろう？」「それ以外の解き方はないのだろうか？」など、先生の話を聞く中で考え、聞いたことから考えを広げようとすることが出来る。	・自分の目標のために、家庭学習は重要だということを理解しているため、勉強勉や行事でどうしても時間があったとしても、長期的なスパンで見て、勉強に計画的に取り組める。 ・課題をこなすことを目的にしない、苦手な分野、赤信大分野につながる分野など、自分で何を勉強するかを考え、そのために必要なことに取り組むことが出来る。それが分からない場合は、先生に聞いたりして取り組むことが出来る。	・高い目標を掲げさせ、自分でさらに、学ぶ内容を広げて深めていけるよう、その生徒の関心・興味を見極めて、家庭学習の教材や情報を提供し、自分に必要なことを選んで学ぶように促す。 <デジタルを活用するとよさそうな部分> ・その生徒の興味・関心に応じた内容を、インターネットを活用して探し、提供する。
中位層（＝学力の3層、B層）	・応用、発展部分では、多少分からない点もあるが、異種、類	・書かれていることは全てノートに取る結向があり、逆に、板書以外の先生の話などあまりノートに取らない	・一部、大切な点を逃してしまうことがあるが、メモを取りながら話を聞くことが出来る。 ・先生の話は、聞いたことを理		・授業の中で、何を学ぶ時間なのか、ということを意識させ、授業を受けての自分の考え、自分がポイントだと思ったことをまとめさせる工程を入れる。 ・学んだことを応用して考えてみるような質問を意図的に投げ掛ける。 ・定期テストや模試、小テストから、自らの出来ていない部分はどこかを掴ませ、その部

＊先生方のご意見を基に編集部で作成

な概念だからこそ、具体的な生徒の姿で語り、それぞれの生徒にとって次に目指すのはどのような状態なのか、そのためにはどのような指導が求められるのかを考えるのはとても有意義だと思います。

木村　1年生の学年団は取り入れやすいでしょう。入学後数か月経った段階で、生徒理解を共有するための機会として使えそうです。学年主任が声を掛ければ、学年全体の取り組みに出来るでしょう。新しく赴任した教師、新採には学校のSIや目標を知るチャンスになりそうです。

教科横断的な指導コンセプトを打ち出す

――では実際に、お2人がもしも同じ高校にご勤務していたら、どんな風に生徒理解を共有し、指導の組織化につなげていくか、デモンストレーションをお願いします。まず、上位層や中位層の生徒について検討いただけますか。

木村　生徒の状況を思い浮かべてみると、いろいろなことが話題に出来そうです。例えば私が指導してきた生徒の中には、授業態度がよく、家庭学習もきちんとやっているのに成績がなかなか上がらない生徒がいます。本当にまじめに勉強しているのに伸びない生徒を目の前にした時、「そのうち成績は上がる」と励ましながらも、内心はこちらにも具体的な見通しが立っていないという経験はきっと誰もがしているはずです。

福島　ノートはきちんと取っているのに、理解が確かではないのか、模試などで結果が出ない生徒ですよね。私も心当たりがあります。授業中の話の聞き方はどうでしょうか？

木村　目の前の授業の内容はしっかり理解しようとしているけれど、もう一歩深めて、「別の解き方はないのか」など、自分の頭で再考することがまだ不十分な気がします。

福島　もしそうだとしたら、学んだことを応用して考えてみるような質問を意図的に投げ掛けることが、その層の生徒にとっての具体的な授業改善につながるかもしれませんね。

木村　同時に、原理・原則・法則に立ち返るような声掛けを、もっと心掛けるべきだと思います。例えば理科なら、教科書の定理・公式を暗記し、問題が解けるかどうかはもちろん、そもそもどのような規則性から導き出されたかを自分の言葉で他者に説明できるところまで求めることで、難関大の個別試験に対応できる学力の土台が身に付くはずです。

福島　生徒が、自分の学び方が今のままでよいかを判断するためのヒントを、教師が層別に提示することが大切です。生徒が自分なりに判断し、行動してみる機会を与えることは、まさに主体性の育成の種まきに通じます。ですから宿題でも、生徒が与えられるままに解くのではなく、「自分にはこの教科の学習はどこまで必要なのか」を考え、自己決定するような課題の出し方も考えたいです。例えば、問題を3題出し、理解度やニーズによって2題解くか、3題解くかを決めさせるのも一案です。与えられた課題をまじめに解く生徒ほど、必要なものを見抜いて取り組む勇気を持たせたいのです。そのため

には、自分がどこまで分かっているのかを生徒が知っておくこと、学力層に見合った課題を教師が厳選することが求められます。

木村　いろいろな教科の先生と一緒に検討する段階では、教科共通の学び方を整理した上で、その層の状態を踏まえた指導コンセプトを共有しておき、授業や家庭学習課題の具体策は、あくまで各教科担当が判断していくという流れがよいですね。

学び方の土台となる生活習慣も議論する

――下位層の生徒の様子と指導の方策を整理していくと、どんなことが話題になりそうでしょうか。

福島　「出来るようになりたい」と思うのはどの層の生徒も同じであり、そのための機会は等しく与えたいものです。そこでこの層では、「やったら出来た」という達成感を与えながら、高校の学びで必要な主体性とはどのようなものかを経験を通して気付かせたいと思います。例えば、「本校の下位層の生徒には、まず強制的に取り組ませ、達成感を得るチャンスを与える」という指導コンセプトも考えられますね。

木村　基本的な生活習慣を整えることが、学習をスタートさせるために不可欠というのは、まず現場の共通認識ですから、そこもしっかりと議論したいところです。先生の話をきちんと聞いているか、ノートはしっかりと取れているかなど、学びに向かう姿勢を段階的に捉えて、今この生徒はどの段階にいるのか、次にどんな状態を目指すのかを共有してみたいです。その場合、授業の受け方や家庭学習の取り組み方に加えて、出席や提出物の状況など、生活面をチェックする項目を作って、生徒の状態を議論するとよいでしょう。

福島　板書をノートに取ることが出来るようになっただけでも、大きな進歩と評価できる場合もあるでしょうからね。そうした成長を見逃すことなく、教科を横断して教師が「やったら出来たじゃないか！」と声を掛けられるようになるのが、多層化の中で求められる指導の組織化です。

――学力層別の指導の方策を検討する際、今後はデジタル教材をどのように活用できるかも考えていくべきテーマだと思われます。

「多層化を切り口に、生徒観や指導方策を共有する過程に価値がある」

福島　限られた時間の中でさまざまな生徒に応じた学びを提供するには、デジタル教材の可能性も検討に値するかもしれません。特に上位層や中位層には、自分のペースで学習を進め、学習履歴を管理するツールとして今後、デジタル教材の活用場面が増えることも予想されます。

木村　福島先生は、下位層にとってデジタル教材はどういう可能性があると考えていますか？　ドリル的な問題をゲーム感覚で解いていくようなデジタル教材があったとして、生徒が面白さに引かれて時間管理の意識なく使うようだと、それは高校生に求める主体的な学習とは言えない気がするのですが。

福島　木村先生のその気持ちにはとても共感できます。ただその上で、そうしたゲーム的な面白さの中でもよいので、「出来た」という実感を味わわせ、主体性の土台を築くことが必要な層もいるような気がします。高校入学までにいろいろな要因で学びに向かってこなかった生徒にとって、自分でやってみようと判断したことで結果が出る体験は、自分の可能性を認め、自己肯定感を得る契機になるかもしれません。

木村　学びに向き合ってこなかった層だからこそ、デジタルがある局面で効果があるのではないかというのは、もっと議論したいテーマです。いずれにしても、デジタル教材は効果的に使えると判断した時に使えばよいし、使わなくても他の手法で目標が達成できるのであれば、それでよいもの、あくまでもツールなのだと思います。ただ、正直に言えば、そうしたツールとしてのデジタル教材に関する知識は、私を含めて多くの高校教師がまだ不十分だと思います。国内、海外の先進事例などをもっと学んでいきたいです。

多層化への対応が教師と学校を強くする

皆が取り組みたいと思える指導を共有していく

――今回のような多層化を共有する議論は、校内でどのように進めていけばよいでしょうか。

木村　新しい取り組みを始めようとした時に、「これは必要なのか？」と疑問の声が上がることはどんな組織でもあることです。「今までの指導では何がダメなのか？」「各自がよい授業をやっていればそれで十分だ」という考えの同僚がもしもいたとしたのなら、「では、現状に課題を感じていないのか」「生徒観、指導観を共有することで更に高いレベルで学校力が維持できる」と説明することが必要だと思います。

「生徒を一歩向上させるため、これまで以上に多様な指導を受け入れたい」

福島　生徒理解や指導改善への意識が高い人にまず声を掛け、有志で議論を進めて検討表を作ってから、その後に経験豊富なベテランの先生にチェックしてもらうのもよいかもしれません。最初から全員の議論にこだわると動きが鈍くなるかもしれないからです。ただ、作ったものを全員の目にさらし、特にベテランの先生に批判してもらう工程は外せません。そこで、我々はものの見方を学ぶことが出来るからです。

木村　皆が議論に気軽に参加できるようにするためには、現状の学校の課題がどの教科、教師にあるかの責任論をするのではないということを明確にしたいです。みんなで取り組むとより効果が上がりそうな指導を共有する雰囲気をつくることが大切だと思います。

福島　成果が出ている先生を見ると、「○○先生だから出来たことだ」と思ってしまいがちです。あの人は特別だけど、自分は普通の教師だから出来ない、と。しかし、その先生がなぜ成果を出せたのか、分析して話し合わなければ学校全体の成長につながらず、その先生の努力は個人ベースのものにとどまってしまいます。どんなアプローチで生徒の学び方が変わるかを校内で共有する仕組みづくりとして、こうした検討表を利用したいですね。だからこそ、出来上がった検討表以上に、多層化を切り口に「どんな生徒にどんな働き掛けをしているのか」を語り合う過程に価値がある気がします。

木村　多層化した生徒の状態をどう評価するのか、そして主体的な学習者として一歩ずつステップアップさせるためにどんな指導を行うのか、同僚や先輩の考えを言語化し、共有することで、教師が自分のやり方にこだわりすぎることなく、これまで以上に多様な指導を受け入れられるようになると素晴らしいですね。

福島　それまで、皆分かっているはずだと不文律のままで済んでいた学校の不易も、ふとしたきっかけで、お互いの理解に大きなギャップがあることに気付くことがあります。多層化が進む今こそ、その高校の不易を言語化することで、各教師の技量が校内で共有され、学校力が一歩高いところで平準化されることが期待できます。私たち教師こそ、主体性を発揮して、そうした新しい取り組みに挑戦すべきだと思います。

木村　私にとって、今回の対談はとても勉強になるものでした。福島先生のような先輩と一緒に働けたらとても面白いと思います。神奈川と鳥取という、遠く離れた地で働き、経験や価値観も異なる教師が教育の新しい可能性について共感し合えたことに感動を覚えますし、今日ここで学んだことをぜひ学校でも生かしていきたいと思います。